

## 雜 錄

### ウィルヘルム・フォン・フンボルト

#### アルフレート・ホイムラー

ヘーゲル、ゲーテ、フンボルトと巨星が相次いで傾ちた一八三  
一—三五年間は、獨逸民族が國王と門地との制限を脱して、民族的  
統一を體驗し、將來の政治的統一を豫感しはじめた時代の終りに  
當つてゐる。君主文化の末期、貴族の没落と市民階級の啓蒙の時  
代を承け、獨逸民族が歐羅巴の中心に自然的歴史的地位を占めん  
とする激烈なる闘争の時代に先立つてゐる。ゲーテは、政治は別  
として、世紀の總ての努力を一身に綜めたが、自然と直接的交渉  
をもつことによつて、彼の時代を超越してゐる。ヘーゲルは歴史  
的世界に注目し、轉換期の精神的、政治的運動を強力に彼の體系  
に綜合し盡した。フンボルトは、前二者の如く綜括的、完結的に  
ではなく、身躬ら體驗する觀察者と解釋者として、獨逸民族の不  
滅なものに關係してゐる。

當時の人々はフンボルトをゲーテやヘーゲルとではなしに、  
シュタインやクナイゼナウと並べて考へた。彼程、前二者の世界を  
も、後二者の世界をも代表してゐるものはない。この二つの世界  
に同時に屬することが彼の特異性と運命である。形相と思想の世  
界に沈潜しながら、政治家として世俗の仕事に干與する。人間の

本質に關する形而上學的考察に耽りながら、普魯西の内務大臣と  
なり、文献學者として研究に従事しつゝ、本意なく政治家となる。  
家柄によつて政治的經歷に向ふやう定められながら、天性によつ  
て出來得る限り政治から遠ざからうとした。彼の生の行程は全  
く常道を離れてゐる。フンボルトは、靜穩の生活から出て、十年  
間政治家であり、再び靜穩の生活に歸つてゐる。しかしかゝる經  
歴は、感受性に富める、審美的性格を有する人間が、時代の出來  
事に無理やりに引きずられたと解すべきであらうか。彼は、事象  
から身を引いて、それを審美的に觀察するが如き者ではない。威  
程藝術作品と諸觀念の世界が彼の生れ故郷であつた。ライプテヒ  
の戦に際して、「よき詩は永遠の生命がある。戦争や媾和は消滅す  
る」とゲンツ宛に書いてゐる。しかし、彼の觀念の生活は徹底的  
に内面的なる生活を遂らんとする「傾向、自立的存在の愛、それ  
に關聯する教養原理は、彼の魂の受動的、審美的態度から生じた  
のではない。出來事に引きずられたでもなく、彼の本質を變へ  
たのでもない。極めて徐々に發展はしたけれども、彼の人生觀は  
つとに確立し、常に同一であつた。彼の強い感受性と、多様な錯  
綜を極めた本質の前堡の背後には、ニーチェの所謂「花崗石の如  
き自我」が、強靱な忍耐強い意志が、自己と自己の運命を容赦し  
ない人間が隠れてゐる。フンボルトは「ひとば自己を失ふことは  
あり得ない」といつた人間である。彼は徹底的に意志の人であり、  
自傳の斷片にいふやうに、十二歳の時から自制を自己目的として  
續けた人である。そして彼の意志は又全く獨特なものである。い

きなり世界にはたらしきかけようとせず、さし當つてそれがあるまゝにして置く。總ての生ける力の獨立性を深く感じ、それは自由に操縱されず、固有の本性に従つて活動し、外部からの命令には従はないといふことを確かに知つてゐたのである。彼の見るところでは、世界は、個々の存在者が各自己の法則によつて運動する完結せる全體であり、その全體は靜止してゐる。しかし、世界の外に立つて、世界をひとが干與すべき一大事としてよりも芝居として觀察する者は、この「世界外の立脚點」を、絶對的自制によつて獲得したのである。世界に對立するのは、受動的なる鏡ではなく、意志する自我であり、常に行爲によつて世界にはたらしきかける可能性を有しながら、必然性がそれを要求するときにのみ、はたらしきかけ、しかもその際にも特定の仕方になす自我である。かかる意志は控目であり、事物を進行せしめ、自己がはたらしきかけようとする世界の法則性に對して寛容であり、外見的には放任することによつてその目標を間接的に到達するであらう。

フンホルトは彼の「鐵石の如き不撓不屈」について語り、彼の自制の特異性をその柔軟性に見出してゐる。主張、企圖、計畫、それを達成する方法を固執せず、それらを比較的容易に變へ得る。外的なものに於ては、他人に讓歩しながら、内的なものに於ては自己を固執する傾向をもつてゐる。一八〇九年ケーニヒスベルクから夫人に宛てた書簡は、彼の肖像を最も完全に描いてゐる。「本來的な行爲に於てはたらく意志は怖ろしく運命に依存し、運命といふ名を以て呼ぶことを欲しない諸偶然にさへ依存する。だが、

魂の奥底に存し、行爲と生活との方法全體に關係する意志は信じて疑はない。だから、個々の事物は喜んで偶然に委せ、直接的にはたらしきかけないが、意欲を固執して、境遇そのものを故意に作るよりは寧ろ、境遇を利用する。かくして、人間に外見的にも實際にも、多くの自由を許しつゝ、人間を甚だ確定的に強制し、終極に於て彼の運命をも規定する」それ故、彼が政治的鬭争裡に入つたのは單なる外的な偶然によつてではなく、一大事が彼の出馬を促したのである。一八一三年の危機に續く數年間に、獨逸人として歐羅巴の時局の頂點に立ち、正しき行爲と深き眼識を以て、ワイマールの文化の解釋者であるのみならず、同時に又獨逸の政治的運命の解釋者であることを示したのである。

彼の政治的活動の一々には立入らずに、その本源である世界觀を見よう。フンホルトは、人々がテオドル・ケルナーの戦死を惜み、彼の如き才人が危険に身を曝したのを非難するのを聞いて夫人宛に書いてゐる。「才能について、特に詩人について妄りに語つてはならない。眞の才能と眞の精神は人格から生れ、それによつて養はれる。さうでないものは學問に於ては多かれ少かれ機械的であり、藝術に於ては平板で、無意味である」

彼の見るところによれば、メッテルニヒは獨逸の統一運動には大した意味を有しない。「その兩者を含むけれども普露西と墺太利とではない一獨逸國が知性的、道德の意味に於て、實際に存在すること、そしてこの獨逸國を政治的に支持しなければならぬといふこと、それをメッテルニヒは感せず、又理解しない」。フンホ

ルトは協同體的な、緊密な紐帶の必要を感じ、又その結合の困難を見逃しはしない。しかし、「獨逸人は一であり、常に一でなければならぬ」といふ思想は永久に保持すべきであると、一八一三年十月二日夫人宛に書いてゐる。獨逸人の國民的統一精神は勃興しつつあるが、奧太利はそれに歩調を合せない。「時代の精神を抑制することは如何なる力もなし得ない。歴史は未來に關して多くの解明を與へる。しかし、一般人士には理解されない」。彼の政治的眼識は遠く十九世紀を見抜いてゐる。「時代の精神は普露西を獨逸の盟主たらしめんとしてゐる。血腥き戦は起るであらうが、如何なるものもこの精神を抑制することは出来ない」と一八一四年の暮日に書いてゐる。

フンホルトは國家的必然性を正しく感じたのみならず、戦闘に當つた民衆をも理解してゐる。一八一四年十一月にいふ。「民衆は痛烈なる苦難と壓迫とをうけてゐる。大衆は、戦争によつて、彼等の能力を知つた」。民衆と上層階級とを出來得る限り緊密に結合することの必要を彼は切實に感じる。「總ての力、總ての生命、總ての強壯さ、總ての清新さはたゞ民衆にのみ存する」「下層階級はその教育のために上層階級を大して要しない。彼等は本來獨立してゐる。恰かも自然は人間を要せず、人間が自然を要するやうに」といつてゐる。一八二四年十一月二十日ブルゴエルナーから夫人に知らせてゐる。冶金長ホヰツァーの臨終の態度、その勇氣と誠實は彼を深く感動させた。「人間の本性はかくの如き素朴な人物に於て一層純粹に現れる。人間の最善なるもの、最高貴

なるものは、教育等に依存すること極めて僅少である。民衆に於けるかくの如き眞價の協力こそ總ての民族的發展に於ける最高なるもの、基礎である」

か、る晩年の言説を青年期の政治的著作（新佛蘭西憲法に因んで憲法を論ず、一七九一年）に見える特性的な命題と比較すると、彼の思惟の恒常性と整合性とが見られる。この小著は、彼の政治的本能の輝ける證明であり、時代の出來事を唯一の正しい見方で評價する能力を示してゐる。彼は新しい憲法と古い憲法との無造作な結合に反對してそれを可能ならしめる紐帶は何處にあるか。人間に於て榮えるものは、彼の内部から起り、外から與へられなければならない。そして國家とは人間の能動的、受動的諸力の總和以外の何であらうか」といつてゐる。理性からは出發せずに、人間の能動的、受動的諸力から出發してゐるのは極めて重要なことである。彼の世紀に反對して「理性は現存する素材を形成することは出來るが、新に創造する力を有しない。この力は事物の本質にのみ存する。眞に賢明なる理性はこの力をばたらかしめ、それを指導しようとする。憲法は人間に接枝されることは出来ない」といつてゐる。

力の概念は、フンホルトの思惟の不變的な基礎概念である。總ての力は個性的であり、その限り個性は彼の基礎概念なる力にも屬する。力と個性と、その何れが中心概念であるか、それは問題である。個性の概念は動もすれば、フンホルトの世界觀を審美的世界觀（完成せる、美なる個性）と見做す謬見と結合し勝ちであ

る。ところが力の概念は元來全く別の方向を示してゐる。力と努力とは一であり、意志の概念とは結びつくが、自らの中に休める完成せる形態とは無造作に結びつかない。力の概念は、自然的、政治的概念である。科學の教へるやうに、總ての生ける力は遺傳によつて、種族と呼ばれる一層大なる文化單位と關係する。フンホルトは、彼の同時代人と同じく、種族の意義を充分に理解してはゐないが、彼の哲學は歴史を生ける自然的諸力から考察する道を拓いてゐる。

若きフンホルトの唯一の完成せる、しかし公にされなかつた著作「國家活動の諸限界を規定せんとする試論考案（一七九二年）」は自由主義の聖書の中に數へられ、國家に對して個體の自由を擁護するものと讀まれて來た、がそれは謬つてゐる。この著作はフンホルトの形而上學的確信の展開である。「生ける諸力の形而上學的考案」といふ表題をつければ正しく讀まれるであらう。フンホルトの思想圈のライプニツ的背景は、こゝに最も明瞭にあらはれてゐる。且つ又、問題になつてゐる國家といふのは、政治的活動性の全體をいふのではない。フンホルトの戰ふ國家とは、總てを上から規制し、能動的、受動的諸力の綜體なる民衆を除外する傾向を有する絕對的君主國家の歴史的形態である。個體的なる力を、個人のみならず民族の個體的なる力を制限する限り、國家と戰はなければならぬ。若きフンホルトにとつては、國家は結果として現れるもの、生ける諸力に反對するものの一であつた。人を物のために、力を結果のために忽せにすることは最も悪しき誤謬であ

る。力の運動の形式は結合が闘争である。闘争が戰爭であるか競争であるかは、文化の段階に依存する。國家は戰爭を促進してはならないやうに、必然性がそれを要求する際には、無理に阻止してはならない。「戰爭は人類の教化に最も有效な現象の一である」戰のための訓練には兵士の勇敢、敏捷、服従をつくるだけでは不十分である。常に祖國のために戰ふことを厭はない眞の武人、否寧ろ高貴なる市民の精神を鼓吹しなければならぬ。この自由主義的と呼ばれる少壯期の著作は、國民皆兵の計畫を含み、政治的見地に於て、同時代の最も優れた人々をも遙かに抜んでゐる。個人の安全を保障するのではなく、國家主義を否定的に批判し、その制度によつて民族の力が弱められることを防止せんとするのである。彼は、戰爭なき一時的な状態としての平和を眞の平和から區別し、我々は今日平和の結實を樂しむけれども、平和性の結實を樂しまないといつてゐる。彼の所謂平和性とは、存在者の内的なる諸力から生じる、即ち當事者の諸力に相應せる平和である。彼の政治的活動の頂點に於て、メッテルニヒの考へるが如き無賠償無併合の辨利に反對して、國王に書いてゐる。「國家の崩壞は戰爭にのみよるとは限らない。平和が國家から防衛の手段を奪ひ、國家をその敵の犠牲とするなら平和の方が遙かに確實に國家を破滅に陥れるのである」

フンホルトの生涯に於て、歴史的に見て特に重點の置かれるべきは次の一事である。彼は「一七九七—一八〇一年の巴里滞在中に彼の精神的獨逸性を發見し、對比によつてそれを生々と強く意識

した。一七九九年三月十八日、ゲーテに書いてゐる。「哲學と藝術に携はるるものは、他のものよりも一層本來的な意味に於て祖國に屬してゐる」。哲學と藝術とは、感覺と心術とがそれ自ら形成した自國の言語を他のものより一層要する。各民族は自國語を益々獨有的に形成し、異種族間の親密なる了解は益々困難となる。文化の發達は國民性を抹消せず、その差異を増大する。教養は特異なるものを一様化せず、却つてそれを顯著にする。この獨逸的教養の特異性の發見はフンホルトにとつて、精神的、政治的意味を有する貴重な體驗であつた。

巴里滞在の中に、バスク族地方の旅行に因んで、フンホルトは科學的述作の構想を懷いた。彼はその仕上げに生涯の最後の十五年を捧げ、それによつて思想の世界に於ける偉大なる建設者の一人に數へられるのである。それは言語哲學と關聯せる比較的、歴史的言語學の構想であつた。この大計畫は、獨逸文化と佛蘭西文化との本質的相違と、生ける諸力の形而上學とに由來する。啓蒙時代の理性哲學と文獻學とからではなく、彼の精神力の本源なる深さから起れるものである。「私は長らく國民性と言語の相違、その影響についての論文を考へてゐる」と一八〇〇年末ゲーテに書いてゐる。殆んど同じ時に、シルラーに宛て、將來の著作の體系的な基礎的思想を述べてゐる。「多少とか、所有物の豊富とかではなしに、力の強さが問題である」かゝる思想に導かれて、彼は終に、「カウイ語研究」の序論に於ける古典的なる定式化——言語はエルゴンではなくして、エネルゲイアである——に到達したので

ある。フンホルトの言語學的諸研究は國家意識と結合せる近代の歴史意識の組成に關係してゐる。それは、眞に偉大なる科學的創造は單なる悟性からではなく、研究しつゝ自己を訓練する心情から生れるといふことの證明である。彼が幼少期から人間の本質と人間性の發展について思索した總ては、彼の言語哲學に流れ込んでゐる。言語哲學はいはゞ、彼の總ての構想に暗示されてゐる人間と歴史との哲學の最も完全に論じ盡された一章である。古代、特に希臘人の事績の研究から、この偉大な歴史的存在の哲學は幾度も新しい力を引き出したのである。我々はこゝに、この偉大な業績の一契機を擧げるに止めよう。彼は言語の形式を深く物的自然に、人間の構想力と感情に沈め、しかも動物と人間との限界を侵害することはない。感性的音聲は、精神がたゞ使用するに止る隨意の手段ではない。否、音聲形式と内的言語形式との結合こそ言語の完成である。感性一般に於てのやうに、音聲形式には無限の多様性が見出される。これに反して、たゞ精神的活動にのみ依存する、言語の知性的部分は總ての人間を通じて一様でなければならぬやうに見える。ところが、言語のこの部分（内的言語形式）は比較的大なる一様性を維持するのみで、完全な一様性は存在しない。こゝにもその諸創造は悟性によつて、單なる概念に従つては測られない諸力がはたらいてゐるのである。構想力と感情は個體的なるものを形成し、この兩者には民族の個體的な性格が現れる。そして、そこに於て同一のものが種々の限定に於て自己を表現し得る方法の多様性は無限に進むのである。

文部大臣として在任十四月間になした業績は、フンホルトの政治的活動全體の歴史である。彼の關心は普露西の全教育機關を覆ひ、ペスタロッチの方法は小學校に根を下し、新人文主義は中等學校に行き亘つたが、彼の名聲は又柏林大學の創立に懸つてゐる。知識の全體と、全人の教育、それが新しい創造の根本思想であつた。改革の時代には、教育は極めて重要な政治的機能を有する。社會的、政治的組織の建設には、新しい使命に堪へ得た指導者層を訓練することは、究極の問題ではなかつた。貴族は政治的後繼者をつくる力を失つてゐた。それから汲み出し得る貯水池は尙ほ他に一つあつたが、それは勃興しつゝある民衆層から、特に市民階級から充されてゐた。かくの如き、總ての力を新しい政治組織に適合させる情勢に於ては、經濟的生活を超えて一層高き生活の使命を感じる人々を結合し、教育する基礎を見出すことが最も肝要であつた。十八世紀末に於ては、かゝる基礎は科學と詩と哲學によつて生出された新しい教養であつた。そこに於ては、貴族と市民との間に相違はない。それに傑出するものは、彼の才能によつて如何なる官職につく資格をも備へてゐた。啓蒙、勃興市民階級によつて促進された新しい教養は、改革の時代に於て、新しい指導者層を獲得するために必要な手段として表れる。かゝる指導者層の典型は、新しい意味で「アカデミク」な教養を有する官吏である。在官時代のフンホルトの著作の中に、高級官吏の理想を、新しい教養の意味に於て示す著作があることは決して偶然でない。彼は官吏として榮進の道なとりつゝ、フリードリヒ・アウグス

ト・ウォルフやゲーテ、フィヒテやシルラーの友として作上げた精神を新しい國家に運び込んだ。シュタインに於てのやうに、彼に於ても古い時代と新しい時代は握手してゐる。貴族出の彼が市民の政治的經歷の建設者となるのである。しかし彼によつて創造された新しい階級、アカデミクな學者達の階級は市民階級に硬結した。この階級はそれに本來屬する政治的原理から創造されたのではなく、たゞ時勢に恵まれて、國家の一时的な狀勢との一致によつて政治的となつたといふことは直ちに明になつた。驚異すべき瞬間に、哲學と科學とは民族の心臓に植み込まれた。しかし、この瞬間に適合せる、科學的教養と國家との結合を不變的に維持するとき、設計の缺陷は露はにしなければならなかつた。大學は専ら上部から、科學からのみ構成された。民族の生の形式に基礎を有しない、教授と實際的職業教育との二重の使命を帯びるアカデミーであるに過ぎなかつた。柏林大學の創立は獨逸史に於ける優れた演出であつた。しかし、それが永遠の國に於て演ぜられたと、又永久にフンホルトの仕方で國家と教育とを結合しなければならぬと考へるなら、この大學の創立者がその當時さうであつたやうな革命的な考へ方では決してないのである。

曾つてフンホルトはウォルフに「怖ろしい科學」といふ言葉を洩したが、それは化學、植物學等のことである。自然科學は、知識として見られ、研究としては見られなかつた。柏林大學は哲學的、文獻學—歴史學的研究に向つてゐた。だが、科學的研究は今日に於てはもはや特に文獻學や歴史學の研究室に於てではなしに

物理學や化學の實驗室に於ても行はれるといふことは承認されなければならぬ。次に學校としての大學に關する特性である。新しい教育の代表者達は出來得る限り、古い國家の制度から離れようとした。彼等にとつては、大王の軍隊(特に將校團)の中に最高級の學校が見られるといふことは到底考へられなかつた。訓練と名譽とに基礎をもつ將校團の獨特な學校は新しい教育の範圍に屬しなかつた。思惟は全く、強制と自由、機械的と有機的、訓練と教養との反定立の中に動いてゐたのである。一七八九年巴里への旅行の途中、シュトゥットガルトの陸軍大學校を見ていつてゐる。

「かくの如く柔軟な少年時代から成熟せる青年時代まで強ひられた規則的な教育は如何なる一面性を伴ふことだらう。如何なる團體精神が、如何なる教養の一樣性が生じることだらう。總ての人間は本來自立的に存在する。個體を個體のために、個體に固有な諸力と諸能力に従つて形成すること、それが總ての人間教育の唯一の目的でなければならぬ」。學察にも彼は反對して、團體教育はたゞ階級精神、團體精神、一樣性、一面性を伴ひ、有機的教養を伴はないといつてゐる。團體教育をもつ學校は、科學を教へる場合にも、専門學校と考へられてゐた。陸軍大學校も、フンホルトの眼には、商人階級のための専門學校と異なるものとは映らなかつた。單に技術的な専門學校に墮落することを避けんがために指導と服従、朋輩間の友情に存する總ての教育的なるものは、大學から悉く斥けられた。軍隊教育と大學教育とは絶對的對立をなすものであつた。個體の諸力を自立的に進展させなければならぬ

といふがフンホルトの不變の根本思想である。義務の一端を割し、典型を作り、制度を設け、一定の時の經過に於て成就されるものを豫め規定することは彼には不可能であつた。個性的教育の結果は豫め規定されない。これに反して典型設定的教育の結果は(自然的個性の限界内に於て)豫言することが出来る。フンホルトに缺けてゐた、又彼の力の哲學の基礎から見缺けてゐるのが當然であるものは、諸力を延ばし應ずることなく、整へ、その全體を傾注せしめる制度の組織の觀念である。今日、我々は研究と教授と政治的教育との結合の新しい可能性を見る。科學は依然中心を占め、又中心を占めるであらう。しかし、科學的研究はもはや無拘束に相並んで自己を形成する多くの個人によつては營まれず、一つの陣營の朋輩的協同態から榮えるであらう。

(本年四月八日、フンホルト百年忌當日、柏林大學に於ける記念講演の要旨、「國際教育雜誌」第四年、第二冊より服部英次郎抄)